

発達遅れた幼児のコミュニケーション行動 2

大石 益男 佐野 真理子 原 厚子
(国立特殊教育総合研究所) (安来市立安来保育所) (安来市立城谷保育所)

〔研究目的〕

精神発達遅滞を有する幼児における、言語及びコミュニケーション行動の発達の基礎としての、人や物との係わりの成立過程を、指導事例の縦断観察をとうして明らかにすること。

〔研究方法〕

下記事例のビデオ録画から、指導期間内に成立した遊びを抽出し、その成立過程を分析する。

- ① 事例 N・H児 昭和57年8月生まれ
- ② 入所当初(S. 59年4月)親の主訴は、言葉がないこと、なかなか歩き始めないことであった。
- ③ 発達のようす

母親は比較的安定してN児を育ててきている。N児の母親への愛着も成立し、人見知りもあった。歩行開始は2才。60年5月(2才9ヶ月)時の、遠城寺式乳幼児分析的発達検査の結果は次のとおりである。

移動運動 1: 2 ~ 1: 4 手の運動 1: 6 ~ 1: 9
基本的習慣 1: 6 ~ 1: 9 対人関係 1: 0 ~ 1: 2
発語 1: 2 ~ 1: 4 言語理解 1: 4 ~ 1: 6

- ④ 60年5月(2才9ヶ月)頃の遊びのようす

サインペンで紙にら線を書く、絵本をめくって見る、人形に布団を掛ける等、物を用いた遊びは多いが、音声はなく、黙々と無表情に遊ぶという状態で、保母が並行的に関わっても単発的な反応しか返らず、人とのやりとりを楽しむというようすは見られなかった。

〔結 果〕 (本稿では遊び場面に限って述べる)

1. 遊びの変化の概要

お茶をつぐ、飲む、ブロックをはめてつなげていく、風呂敷をかぶる、はずす、といったような、もともとN児が一人でしていた遊びを手伝うという形で保母が加わり、徐々に、役割を交替しながらやりとりを楽しむという遊びに変化するよう係わってきた。このような遊びの中で、お茶を注ぐ時には、身体を傾けて注ぐといった動作後に「ジャー」と音声を伴ったり、「ハイ」と手渡したりして遊びを保母と交互に楽しむようになる。そして単純な繰り返しのある遊びを、保母と交替にするという遊びから、ボールの投げっこ、追っかけっこ、ヨーイ・ドンの遊び、輪投げをする、箱積木を並べて渡っていく、といったルールのある遊びに変わってきている。また、足を拡げボールを持って

構えて「いーい」と合図したり、箱積木を受け取る時に、「ハイ」と両手を差し出したり、人さし指を出して「おっと」(もっと)と要求したり、わざと保母が列からはみだして積木を並べると、「あっち」と指さして直させたりする。そして、「いーい」とか「みとって」や「あっち」といった言葉を使ったコミュニケーションが成立してきている。

2. 遊びの成立過程

以下、紙数の関係で二つの遊びについて述べる。

(1) ヨーイ・ドンの遊びの成立過程

60・10・20

N児が両腕を曲げて、少し早く振って急ぎ足で歩くのを見て、「Nちゃん、ヨーイ・ドン」と肩に手をおいて押し出すようにする。N児は、始めはただ早足になるだけであった。しかし、何回も繰り返すうちに肩に手をおくと保母の顔を振り返ったり、笑いながら走ったりするようになる。

60・11・6

肩に手をおいたり、後ろから近寄って手をおこうとすると、振り返って走り始める。保母はN児を追うように「コラ、マテ、マテ」と言いながら追っかけ、N児が立ち止まると、「ヨーイ・ドン」と言いながら肩を押すとか、手を顔の前で振る動作を繰り返す。N児は、保母の「ヨーイ・ドン」の言葉には反応しないが追っかけられることを喜ぶようなやりとりを楽しめるようになってきた。また、肩を押さえて少し間をおいてヨーイ・ドンと言いながら離すと走り始める。

61・1・13

保母が肩を押さえると保母を見つめ、ヨーイ・ドンと言うと、まだ手を離してなくても走り始める。またこの時「オーイ」と音声模倣が出る。何度も繰り返し、追っかけっこ、走りっこの楽しい相手をする。言葉かけに、強弱をつけたり、ヨーイと間をおいたりするが、この段階では走るのに夢中である。

61・4・30

離れた所から「オーイ」と言って走る構えをして保母を見る。「ヨーイ・ドンしてお入りするの?」と保母もヨーイの構えをすると、N児は走り出し、また立ち止まって保母を見る。保母の「ヨーイ」の合図で構え、ドンの合図を待って走りだすというような場面が

しばしば見られるようになる。

61・6・3

お入りする時、「ヨーイ」と構えて保母を見る。保母も「ヨーイ」と構え、N児をみてN児の出方を待つ。N児の方から「ドン」と言って走りだす。「ヨーイ」に加え、自発的な音声行動として「ドン」が出現し、ヨーイとドンに間をおき、身体の動きと音声のタイミングが合うようになる。

61・7・22

ブランコに座り乗り、「ヨーイ」と言って、ブランコを後ろにひき、「ドン」と言って足を放ち、「ヨーイ」は準備、「ドン」は行動に移るという理解をし、他の場面でも使っている。

61・11・10

遊戯室で、年長児の女の子達数人に「ここ」と指さして座るように指示し、「ヨーイ」と大きく構えて女の子達を見「ドン」と言って、ニコニコして走り回る。女の子達が、一緒に走ろうとすると指さし、「あっち」と言って座って見ているように指示し、「いい」といって、女の子達をみては、「ヨーイ・ドン」と言ってにこにこして、時には「へへ・・・」と笑い声をあげて走り回る。このように、ヨーイの構えが大きくなり、人に自慢してみせるといった感情も表出され、自ら繰り返して、しかも、他者を相手に楽しむという遊びに変わってきた。

61.12.22

保母の身体を押さえ、動かないようにしておいて、自分で身体を屈めて、「ヨーイ」といい、保母に走る構えを求めるようなジェスチュアをする。そして保母が構えと、始めは喜んで笑っていたが、そのうちに「ドン」と言って自分もいっしょに走り始める。また自分は走らず、保母が走るのを笑って見ているというような場面も見られるようになる。

(2) 輪投げ遊びの成立過程

60・6・18

輪投げの前に立っているN児を後ろから抱え込むようにして輪を持たせ、「ポーン」と言いながら手を添えて投げさせる。声を出して笑うので何回も繰り返す。

60・10・7

投げさせると、保母を振り向き笑う。手を添えなくても、輪を持たせると自分で投げるようになる。保母は、「ハイ」と言いながらつぎつぎと輪を渡してやりN児が投げる動作に合わせて「ポーン」等と声をかける。保母が、「つぎは先生」等と言いながら自分で投

げると、始めは輪を取ろうとしていたが、保母が自分で投げるとすぐN児に渡すことがわかり、待つようになる。

61・4・10

N児が投げた後、手を叩くと保母を見て笑ったりするようになる。この頃から投げる動作がゆっくりし、的を狙うという感じになってくる。「ポーン」に近い音声も聞かれるようになってくる。N児が投げた後、保母がチョウダイの動作をして、「センセイニ」等と言うと輪を取ってくれるようになるが、保母が投げるのは見ていないことが多い。

61・6・7

保母の番では輪を渡して、保母が投げるのを見ている。保母は、N児の顔を見ながら反動を付けるようにして動作を大きくして投げると、N児も保母を見て、動作を合わせるように身体をゆらす。

61・6・11

保母が投げるのに合わせて、「ポーン」という音声が出る。また、投げた後保母の顔を見て、笑いながら手を叩く。

〔考 察〕

1. N児のコミュニケーション行動の成立過程では、動作の成立が音声言語の使用に先行しており、むしろ動作を含めた行動の一部として出現している。そして、指導においても、この事例では動作を育てることに重点をおいたことが結果として音声言語の使用につながったと考えることができる。
2. コミュニケーション動作を育てる上で、この事例では、始め、身体接触を含めた指導援助を多くし、後に、視線、音声、ジェスチュアを含む指導に変えたことが有効であったと考えることができる。
3. 「ヨーイドン」も輪投げ遊びも、始めはN児の一人遊びから始まり、最終的には保母、N児の両者が、交互に同型の行動を繰り返しながら楽しむという遊びに変化している。この過程は、一つの動作に習熟した頃に保母が対応の仕方を変えるため、子供は予測がはずれ、保母のほうに視線を合わせ、意図を探ろうとするような行動が生じ、対人認知の成立につながっており、役割交替にもつながっていると考えることができる。